

特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」の評価の在り方

－ 評価における課題の分析と評価基準の作成を通して －

特別支援教育分野 (17220915) 柴田雄一郎

本研究では特別支援学校に在学する子供に対し、「ラーニング・ストーリー」と「吹き出し」を用い、対話を通して授業評価を行った。その結果、「思考・判断・表現」の評価における課題と評価基準となる子供の具体的な姿が導き出された。これらの結果を『特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」の評価基準(試案)』として整理し、評価の在り方について考察した。

[キーワード] 思考・判断・表現, 見える化, ラーニング・ストーリー, 学習評価

1 問題と目的

2017年3月に告示された次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けた取り組みが求められている。特に、「深い学び」を実現するにあたり、教える場面と、子供たちが「思考・判断・表現」することを効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められている(中央教育審議会, 2016)。特別支援教育においても、授業の中で「思考・判断・表現」を評価できる場面を設定することによる、指導と評価の一体化が求められている(国立特別支援教育総合研究所, 2016)。武富・松見(2017)は、特別支援教育の授業研究において、「学習活動を通して、何を学び得たのか明確でない。」という現状を指摘している。これは、特別支援学校で学ぶ子供が言葉によるやりとりが難しかったり表現が読み取りづらかったりする場合があり、子供の内面についての評価が難しい場合が多い現状があるためと考えられる。また、松見(2016)は、知的障害教育における学習評価の課題として、目に見えて評価しやすい「技能」「知識」面に比べ、「思考」「判断」など見えにくい面についての評価がしにくい状況を指摘している。このように、特別支援教育の分野では、「思考・判断・表現」をはじめとする、子供の内面で起きている目には見えにくい部分をどのように評価してゆかが課題となっている。しかし、現段階では、特別支援教育の分野で子供の「思考・判断・表現」の評価方法に関する先行研究は見当たらない。このことから、必要性は求められているものの、実践上様々な課題があ

ることが推察される。したがって、評価における実践上の課題を明らかにし、その課題を踏まえた具体的な評価方法を確立することは急務であると考える。一つの方向性として、子供の目に見えにくい内面を対象として捉えるためには、言語化して記述する方法が挙げられる。国内においては、特別支援学校の作業学習において、学習指導案の中に生徒の「吹き出し」を付けて生徒の思いを文字で記述し、子供の内面について教師が対話することで、より子供の内面の動きに沿った授業実践ができた事例が報告されている(錦織ら, 2015)。これは、見えにくい子供の内面を言語にすることで、「見える化」する取り組みであると言える。

海外の保育実践では子供の内面や学びについて評価する方法として、Carr&Lee(2012)の「ラーニング・ストーリー」がある。これは、子供の活動の姿を写真や作品等の具体物を掲示し、それを見ながら教師や保護者が対話し、ある子供の姿について「題目(title)」を付け、「どんな学びがあったのか(What learning is happening here?)」「機会と可能性(Opportunities and Possibilities)」について言語化していく取り組みである。ラーニング・ストーリーの記述は、指導・支援の改善につながる具体的な課題の記述となっており、この内容が子供の「思考・判断・表現」を評価する際の課題を抽出できる可能性を示唆している。また、言語化や吹き出しの記述を通して子供の内面が見えてくることで、「思考・判断・表現」の評価基準となりうる具体的な姿を導き出すことができると思う。

そこで、本研究では、特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」を評価する際の実践上の課題と評価基準となる子供の具体的な姿を、「ラーニング・ストーリー」と「吹き出し」による授業評価により導き出し、評価基準（試案）として整理することを通して、評価の在り方について考察することを目的とする。

2 方法

(1) 研究計画

1年次は、研究テーマに迫るために、対象児童を抽出し、研究授業を設定して事例研究を行う。「思考・判断・表現」評価における実践上の課題を明らかにし、「思考・判断・表現」の評価基準（試案）を作成する。

2年次は、授業場面での「思考・判断・表現」の評価基準・規準（試案）の活用と効果の検証を行う。

(2) 対象児童について

対象児は、X県立Y特別支援学校に在学する小学部3年のA児（知的代替教育課程、S-M式社会発達検査結果SA：2歳0カ月SQ：24）である。対象授業は、算数科「なかまあつめをしよう」とした。なお、この学習はA児と同じ学級で在学するB児も共に学習している。A児は、操作や視覚的な情報を手がかりとして、学習課題を理解しようと努めており、自ら学習に向かう姿が見られる。一方で、教師が面と向かってA児に問いかけたり、選択を迫ったりすると、視線をそらして黙り込んでしまうことがある。また、教師の誘いかけで活動を始めたたり終えたりすることが難しいことがある。

(3) 期間

20XX年10月～11月の15日間に、1回あたり約30分間の授業を8回計画した。そのうち、分析対象場面を3回計画した（研究授業①②③）。

(4) 手続き

研究の手続きは、以下の手順で行う。

- ①A児の実態把握を元に、授業を計画する。
- ②授業実践（VTR記録）をする。
- ③授業者（筆者）がVTR記録からスクリーンショットで1場面を切り取り、その場面について「吹き出し」「ラーニング・ストーリー」を作成する。
- ④事後研究会で、授業者が「吹き出し」「ラー

ニング・ストーリー」の内容を提示してコメントした後、VTR記録で事実を確認しながら対話を通じた協議によりA児および授業の評価を行う（担任教師2名、大学教師、授業者（筆者））。対話の内容は筆記記録する。

⑤上記の④により明らかになったA児の思考・判断・表現する姿、指導・支援における課題を受けて授業改善を行い、次時の授業を実施する。

⑥本単元のA児における「思考・判断・表現」の具体的な姿及び、指導・支援における課題を一般化し、『特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」の評価基準（試案）』として整理する。

⑦上記の①～⑥までの過程から、「思考・判断・表現」の評価の在り方について考察する。

(5) 記録と分析

ビデオカメラにより、研究対象とする授業場面を記録した。作成した「吹き出し」「ラーニング・ストーリー」はパワーポイントで作成し、事後研究会の場にて大型テレビで提示し、VTR記録も合わせて上映して対話による評価を行った。評価の結果は筆記記録に整理した。筆記記録から本単元におけるA児の「思考・判断・表現」の具体的な姿及び、指導・支援における課題を筆者が記述し、一般化した表現に書き換え、評価基準（試案）の表に整理した。

(6) 倫理的配慮

授業のビデオ撮影および分析結果の取り扱いについては、事前に保護者に対して文書と口頭説明を行い、同意書の提出によって同意を得ている。

3 実践の概要

研究対象とした授業は、小学部算数科「なかまあつめをしよう」の授業である。単元目標は、「同じものを集めたり、異なるもの同士を分けたりすることができる。（全体目標）」「身の回りのものに気づき、属性に注目することができる。（知識・技能）」「合わせたり、見比べたりして、同じものをまとめたり違うものと分けたりできる。（思考・判断・表現）」「類別することに楽しみや達成感を持つ。（学びに向かう力・人間性等）」である。

単元の概要については、A児は1学期までの

学習で、いろいろな形を判別する学習をしてきた。図形の見本を見て、三角形、四角形、丸形等形の特徴を捉えて仲間分けすることに慣れてきているが、まだ定着しているとはいえない。また、A児は10までの数を数唱できるが、数字と具体物の個数が正しく対応していないことがある。将来的に「3までの具体物を数える。」ことを目指して、現在必要な「数量の基礎」に関する力の定着を狙い、この単元を設定した。1時間目から3時間目までは、リンゴ、ブドウ、ナシの3種類の果物ピースが混じったものから教師がイラストで示した果物ピースを探す「くだものさがしゲーム」の活動を行った。4時間目から8時間目までは、同一の学習目標で「はらぺこどうぶつにえさをあげよう」の活動を行った。

4 結果

それぞれの研究授業で作成した「吹き出し」「ラーニング・ストーリー」を図1, 図2, 図3に示した。この図を基に、筆者、担任2名、大学教員1名で対話による評価を行った結果、明らかになったA児の思考・判断・表現する姿(a)、指導・支援における課題(b)を以下に示す。

(1) 研究授業① (2教時)

教師が提示した見本と同じ果物ピースを3種類の果物ピースが混合して入っているケースの中からA児が探し、紙皿に移す場面を対象に協議した。(a)では学習課題を理解していないことによる迷い、戸惑いの姿があった。A児にとって3種の果物ピースから1種類を選ぶ意味、必然性が感じられない可能性が考えられた。(b)では学習課題を理解するための適切な指導と必要な支援の検討、A児にとっての学びの文脈と意味のある教材、道具の用意が指摘された。

【題目】 わかったぞ
私は、Aさんが皿を持ってリンゴをケースに入れた様子を見て、小さいケースに入れてもいいことを提案した。何個か見本を示すと、自分からリンゴをすんなりと入れ始めた。その後、小さいケースを2つ渡すと、ブドウとナシもどんどん分け入れ始めた。

【どんな学びがあったのか】
Aさんにとって、リンゴを皿に集めることは意味を見出せなかった。そして、元のケースと同じ透明の材質の小ケースを使う方が、Aさんにとって「分ける」という意味がわかりやすいことがわかった。

【機会と可能性】
分けることがわかりやすく伝わる工夫をすれば、Aさんはもっと主体的に学習できるかもしれない。例えば、最初から見本を置いておくとか、最初は分けられた状態を提示して、混ぜてから分け直す等の工夫ができるかもしれない。Aさんは、理解をする自分とどんどん取り組むので、課題の量ももっと用意しておくといかもかもしれない。

わかったぞ。ブドウのおうち、ナシのおうちはこっちだな。まとめて入れちゃおう。透明ケースは最初のケースと似てて、分けやすいな。

図1 A児の吹き出しとラーニング・ストーリー (研究授業①)

(2) 研究授業② (5教時)

A児の学びの文脈として「動物が食べたがっている果物を探し食べさせる」活動にした。段ボールに動物の絵(ブタ, ゴリラ, ライオン)を描き、口元に穴をあけ、口の中に果物を入れる流れにした。操作のしやすいよう、果物をボール型にした。(a)ではA児が学習課題を理解し、自分から果物を探し確かめる姿があった。また、授業終了後A児が自分でボールを操作し、透明ケースの中でボールを分類する姿が見られた。(b)では教師が離れると、自分で取り組む姿や、教師と動物が近づくと、緊張している姿があったことから、A児が自分で道具を使って思考できるよう、一人で操作できる道具と場面を作る事、不安を軽減し、安心して学習できる配慮をする点が挙げられた。

【題目】 あれ? あった。
私がAさんに「ないですか。」と確認して、いったん帰った後に、Aさんは自分で残りの赤いボールを探して確認し始めた。すると、リンゴのボールを発見。すぐにブタを?私を?見つめる。私はAさんの視線を感じて「あれ?」と言葉をAさんに向けて発するとAさんも「あれ。」と言ってリンゴのボールを差し出した。

【どんな学びがあったのか】
Aさんは本当にリンゴがないのか気になり、自分で探した。リンゴを見つけたので、ブタに食べさせるということを考えて、視線を私に向けた。

【機会と可能性】
Aさんは、ブタにリンゴを食べさせることを理解して、自分でやろうとしている。先生がブタが近くに来るとちょっと緊張してしまうけれど、一人で落ち着いて取り組む時間があれば自分でやりたいのかもかもしれない。

あれ。あった。これ、リンゴだ。先生は、「ないですか。」って言って行っちゃったけど、あったよ。どうしよう。食べさせ方がいいのかな。

図2 A児の吹き出しとラーニング・ストーリー (研究授業②)

(3) 研究授業③ (7教時)

A児が一人で操作できるよう、透明ケースに果物のシールを貼った。動物の存在に緊張した様子が見られたため廊下から登場していた3種類の動物を教室内に配置した。この日はB児が不在であった(a)ではB児不在、教師と一対一の状況、授業改善による変化等「いつもと違う」状況へ対応しようとする姿があった。(b)では教師にとっての授業改善は子供の視点に立てば変化でもあるため、学習を繰り返し同じ流れにする等の配慮の必要性が挙げられた。

【題目】 いいのかな?
Aさんは、私が果物を分ける透明ケースを用意してみたが、果物を分けなかった。私がゴリラと一緒にAさんに近づき、ブドウの見本を見せると、自分からブドウを持った。しかし、自分からブドウをすぐ食べさせようとはしないで、参観している担任の方を見ている。

【どんな学びがあったのか】
Aさんにとっては、新しく登場した透明ケースの意味がわからなかった。しかし、動物が登壇し、食べたい果物の見本を提示されると、同じ果物を探して食べさせる意味がわかり、ブドウを手にとった。しかし、いつもと違う教材、流れがあることで、分かったことを実行しているのか、不安に思い、参観している担任の先生に助けを求めるように視線を送った。

【機会と可能性】
Aさんは、いつもと違う教材、流れがあると別の学習と認識してしまうかもしれない。いつもと同じ教材、学習の流れを崩さない方が、Aさんに取って分かりやすく、安心して学習できるのではないかな。

ゴリラさんの食べたいのはブドウだ。ゴリラさんが来たってことは食べさせていいんだよ。でも、今日は教室の中に動物がいるし、新しく透明ケースが出てきたし、違う勉強なのか。先生、私はブドウ食べさせていいんだよ?

図3 A児の吹き出しとラーニング・ストーリー (研究授業③)

(4) 評価基準（試案）の作成

結果 (1) (2) (3) の (a) (b) を一般化した表現に書き換え、『特別支援学校に在籍する子供の「思考・判断・表現」における評価基準（試案）』を表1のように整理した。

表1 特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」評価基準（試案）

評価区分	判断基準	子供の姿	思考・判断・表現	指導・支援の評価の観点
1		・対象に注意を向けていない。	×思考×判断×表現	
2-1	右記のうち1つはできる	・対象に注意を向けている。	○思考×判断×表現	・環境調整 ・題材の見直し
2-2	右記のうち2つはできる	・対象的な反応をしている。 ・対象や発問に関係のない反応をしている。または発本や字本の模倣をしている。	×思考○判断×表現	・健康状態や心理的安定等への配慮 ・発問の工夫
2-3	右記すべてできる		×思考×判断○表現	・特徴や差異に応じたための支援 ・対象に関わる時間の確保
3-1	右記のうち1つはできる	・与えられた枠組みの中で道具を操作しようとしている。	○思考○判断×表現	・行動の選択の用意
3-2	右記のうち2つはできる	・模倣が不明確もしくはないが、道具を操作して答えている。 ・道具を反発的に操作して、答えを出している。	○思考×判断○表現	・刺激の調整 ・自己選択・自己決定機会の設定 ・表現する手段の用意
3-3	右記すべてできる		×思考○判断○表現	・適切なフィードバックの工夫 ・判断基準や参考となる経験の用意
4		・道具を操作しながら試行錯誤したり、答えを出したりしている。	○思考○判断○表現	・模倣の確認準備の設定

5 考察

本実践より、特別支援学校に在学する子供の「思考・判断・表現」の評価においては、子供が学習目標を達成するための適切な指導・必要な支援ができていないか、子供にとって意味のある思考の道具があるか、個々の子供に必要な自立活動の内容に対する支援がされているか等、授業づくりにおいて前提となる配慮事項が十分に吟味される必要があることが示唆された。

また、実践とその結果から、評価にあたっては、何を評価の対象とするのかについて検討する必要がある。「思考・判断・表現」は相互に関連し影響していることを考えると、評価基準に子供の姿を当てはめるのではなく、子供が「何を」「どのように」「思考・判断・表現」しているのかに焦点をあて、丁寧に見取る必要がある。そのため、評価基準は子供の姿を見取る上での1つの指標として用い、複数の教師による多面的で質的な評価も合わせて行うことで、より子供の見取りの質が高まっていくと考えられる。子供の学びと教師の指導・支援をよりよくするためのアセスメントツールとして評価を位置付けていくことが必要であると考えられる。

6 今後の課題

本研究は1事例の研究によるものであり、今後は作成した評価基準を複数の事例研究に活用し、妥当性、有効性を検証するとともに、成

果と課題を明らかにする必要があると考える。

7 謝辞

本研究にあたり、多くのご理解とご協力をいただいたA児とご家族、Y特別支援学校の関係職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Carr, M. & Lee, W. (2012) “ Learning Stories: Constructing Learner Identities in Early Education.” SAGE Publications.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課部会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』, 15.
- 国立特別支援教育総合研究所編著 (2016) 『「育成を目指す資質・能力」を育むための知的障害教育における学習評価の実践ガイド-学習評価の9実践事例を踏まえて-』, ジアース教育新社.
- 松見和樹 (2016) 「知的障害教育における学習評価の現状と課題-特別支援学校 (知的障害) が作成した研究紀要, 実践記録等の検討から-」, 『国立特別支援教育総合研究所紀要』, 43
- 文部科学省 (2017) 「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/01/09/1399950_3.pdf (最終閲覧日2018年1月26日)
- 錦織聡子・赤荻浩之・神戸久美子・芦田良衣・山崎敏子・渡邊慶・三中西純・奥本富美子・新嶋一隆・新井英靖 (2015) 「人との関わりの中で主体的に働く力を育てる作業学習-吹き出しの指導案およびエピソード記述を用いた実践研究-」. 『茨城大学教育実践研究』 34, 81-95.
- 武富博文・松見和樹 (2017) 『知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング』, 東洋館出版社, 16.

A Study on Assessment of “Thinking, Judgment and Expression” for Students with Disabilities in Schools for Special Needs Education: Through Analyzing Issues of Assessment and Establishing the Assessment Standard

Yuichiro SHIBATA